

明日への伝言

震災で甚大な被害を受けた南蒲生浄化センターの復旧までの歩みについて増子浩規（ひろのり）所長と専門員の菅野清司（きよし）さんに聞きました。



▲発災翌日以降も休むことなく復旧作業に当たりました。写真は放流ゲートのがれき撤去作業

危険と隣り合わせの中で行われた放流ゲートの開放

3月11日午後2時46分、大きな揺れが浄化センターを襲います。「下水を処理する沈殿池の水が何メートルも高く跳ね上がり、立っていられない程でした」と語るのは入庁当初から浄化センターに勤務する菅野さん。川底が見えるほど七北田川の水位が下がったのを見て津波の襲来を察知し、職員と浄化センター内に入った民間業者101人が管理棟の屋上に避難しました。「津波が来たと思った次の瞬間、海辺の松林が消え、どす黒い水が鉄塔を軒並み倒していききました」と菅野さんは話します。

管理棟の周囲は浸水し、電気設備は水没。汚水処理機能が停止する中、市民が下水道を使えなくなる事態を避けるため、下水を海へ放流する緊急ゲートを手動で開放することに。夜明けを待ち、海を目の前にするゲートを目指し、がれきにふさがれた道を進みます。余震と津波の不安を抱えながら、緊迫した状況での作業。

総力を挙げて挑んだ水質改善

「波の音にびくびくしながら、何回シャフトを回したか記憶にないくらい必死でゲートを開けました」と菅野さん。自衛隊のヘリコプターに救助される寸前まで作業が続きました。

その後、民間業者の協力を得て、がれきの撤去や消毒剤の調達を進め、最低限必要な設備を復旧して簡易的な汚水処理を続けました。しかし、沈殿池にたまる汚泥を引き上げるための機械は壊れたまま。「手動で引き上げるには72カ所のハンドルを数時間に1回、回す必要がありました。24時間、職員が交代で猛暑の日も雪の降る日もやり続けました」と菅野さん。増子所長も「先が見通せず、臭いや粉じん、大量のハエなど劣悪な環境の中での作業は本当に大変だったと思います」と話します。震災から約1年後には仮設備を整備し、微生物を利用した暫定的な処理に移行します。大規模施設での処理方法を導入するのは全国的にも例がなく、放流水質を目標値まで改善する

ことが課題でした。「皆で意見を出し合い、試行錯誤を続けることで日に日に水質が改善していきました。現場では昨日より少しでも水質を良くしたいという一心でした」と菅野さんは話します。

仮設備で処理を続けながら、水処理施設の新設工事が急ピッチで進められました。「当時は資材も人員も足りない中、技術者が全国から集結し、通常10年を要すると言われた工事が約4年で完了しました。感謝しかありません」と増子所長。菅野さんも「夜通し働く皆さんの姿に職員も勇気もらいました。全国の皆さんの手で造り上げたこの施設を誇りに思います」と話します。新しい水処理施設は、災害に強く環境に配慮した浄化センターに生まれ変わりました。

菅野さんは「苦しいときもありましたが、海を汚さずきれいな水にして返すという強い思いを共有できたからこそ乗り越えられました」と振り返ります。増子所長は「積み重ねた経験やノウハウは貴重な財産。これを日本、世界へ伝え続けるとともに、後世に残していかなければならない。それが私たちの使命だと考えています」と未来への誓いを話してくれました。



▲増子所長（左）と菅野さん（右）

第1回 南蒲生浄化センター

沿岸部に位置し、市内の汚水の約7割を処理する南蒲生浄化センターは、津波の直撃により壊滅的な被害を受けました。新設された施設は震災時の津波の高さまでかさ上げし、太陽光等の発電設備も導入して、平成28年4月から全系列の運転を開始しています。

